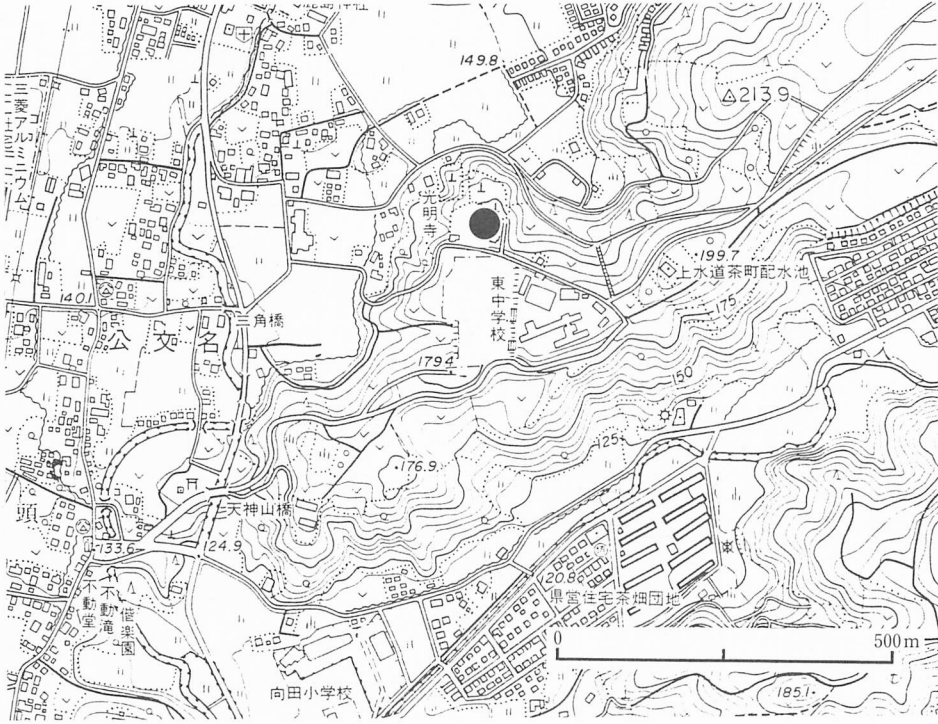


第三章 弥生時代

47 丸山Ⅰ遺跡
まるやま

所在地 裾野市公文名字丸山六八〇番地ほか



位置図



遺跡範囲図



発掘調査図

位置と立地 日向遺跡の北約一三五mのところであり、同遺跡のある丘陵の海拔一八五mの頂部に位置する。公文名の光明寺裏山にあたるため、寺山遺跡といわれたことがある。三方は急斜面で、東側の丸山II遺跡のある丘陵に続いている。丘陵頂部の面積は狭く、遺跡の規模も小さい。

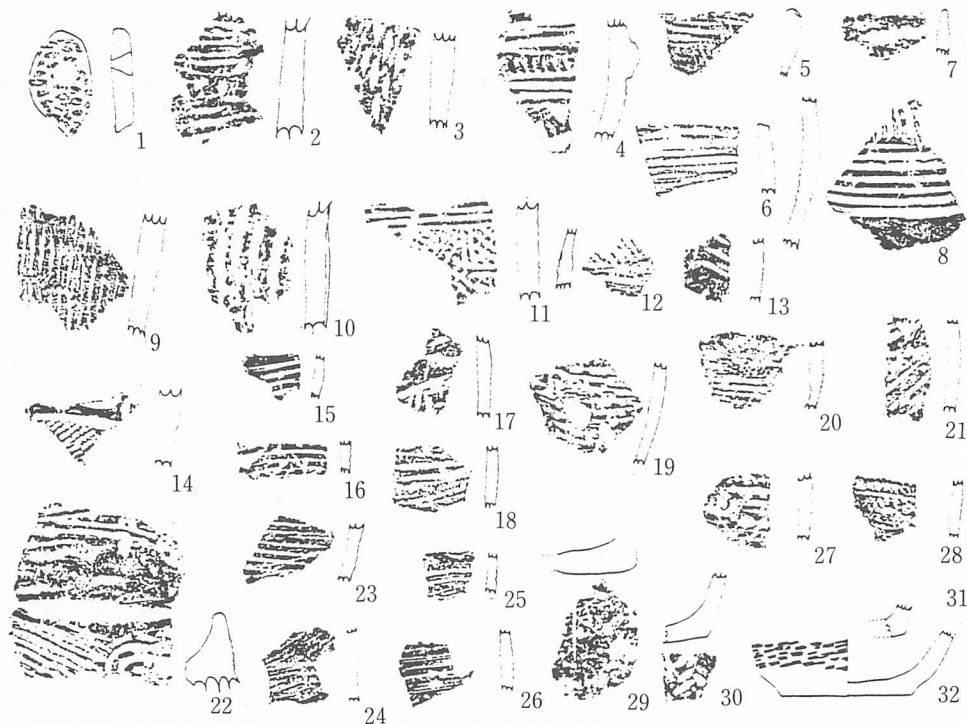
発見と調査 日向、丸山II遺跡と共に、昭和二五年（一九五〇）頃、鈴木恒治が踏査し、土器片の表面採集を行っている。ついで昭和三〇年（一九五五）から三四年（一九五九）にかけて、小野真一は沼津女子高等学校郷土研究部員を指導して表面採集を行い、同年一月、駿豆考古学会主催の発掘調査を実施した。昭和三六年（一九六一）、この結果を駿豆考古学会誌に「裾野市寺山遺跡出土土器の一考察」と題して発表し、さらに昭和三九年（一九六四）、同会主催の弥生文化研究会において、笹津海洋と共に、本遺跡を縄文時代末から弥生時代に移行する遺跡と位置づけた。昭和四八年（一九七三）、本遺跡は日向、丸山II遺跡と共に、裾野市立東中学校建設のため、裾野市教育委員会によって発掘調査が実施された。調査は、丘陵頂部を中心に東西五〇m、南北五〇mの調査区を設定し、このうち一〇m区画一ニカ所、五m区画四八カ所、二m区画二六カ所が発掘調査された。予備調査の段階で、遺物を含んだ層はほとんどないことが確認され、地表下三〇〜四〇cmで、基盤のローム層に達し、遺物も少量しか出土しなかった。

層序と遺構 層序は確認できず、遺構は検出されなかった。

遺物 本遺跡では、各時期の土器がばらばらに出土し、総数六四片中、縄文時代終末期、弥生時代初頭と考えられる土器片が四八片であ

った。第1図1は、楕円押型文土器で、中央に孔がある。2・3・9・10は、胎土に繊維を含み、焼きが悪い。捺糸文の土器で、9は細い捺糸、2・3・10は撚りが太い。4・11・22は、半截竹管による平行線同心円、連続爪形文によって、文様が構成される。以上は、混入された土器で、縄文時代早期、前期のものと思われる。8・12・13・17は、薄手の焼成良好な灰白色または淡赤褐色の土器で、先の平らな棒状施文具で、横に数本の平行線をめぐらし、その上に斜めの平行線を施す。壺形土器の頸部から肩部にかけての破片と思われる。中には、胎土に砂粒を含み、焼成はあまり良好でなく、黄灰色を呈し、先端の丸い棒状施文具で、口縁下に一本の沈線を施し、口縁上に細かい刻みを施すものもある。5・6・15・16・18・21・23・26は、薄手の焼成良好な灰白色、淡黄色を呈し条痕の施された土器片である。口縁上に刻目をつけたものもないものがある。29・30は、底部破片で木葉文と網代文がつけられている。以上の土器片は、芹沢充寛によれば縄文時代終末期から弥生時代初頭であると、笹津海祥は弥生時代初頭であろうとする。石器は、チャート製の搔器、石鏃と磨石の破片及び剝片が、それぞれ二点ずつ出土している。

第2図は、昭和三〇年代に、小野真一の指導によって沼津女子高等学校郷土研究部が丸山遺跡で表面採集したものである。1〜6までは、縄文と沈線によって文様が構成される。うち5は羽状文、6は連続三角文（鋸歯文）がみられる。7〜22までは、条痕文の土器片である。三〜四単位の櫛歯状施文具による条痕が顕著で、12・15は口縁に刻み目がつけられ、13は口縁上に二本の沈線がつけられる。胎土に砂粒を



第1図 丸山I遺跡発掘資料土器拓影

含み、灰白色を呈するものが多い。壺、甕形土器の破片である。すべて弥生時代中期初め頃の土器と思われる。

遺跡の特徴 発掘資料及び表面採集資料をみるかぎりでは、弥生時代中期初頭の遺跡として注目されるが、実態が明らかでないのは惜しまれる。

現状 発掘調査後、裾野市立東中学校敷地となって、遺跡の大半は消滅した。遺跡の主要部は、丸山の裾部とされてきていたが、その後、この部分も光明寺墓地に造成され、ほとんど消滅している。

資料の所在 裾野市教育委員会、加藤学園考古学研究所 保管

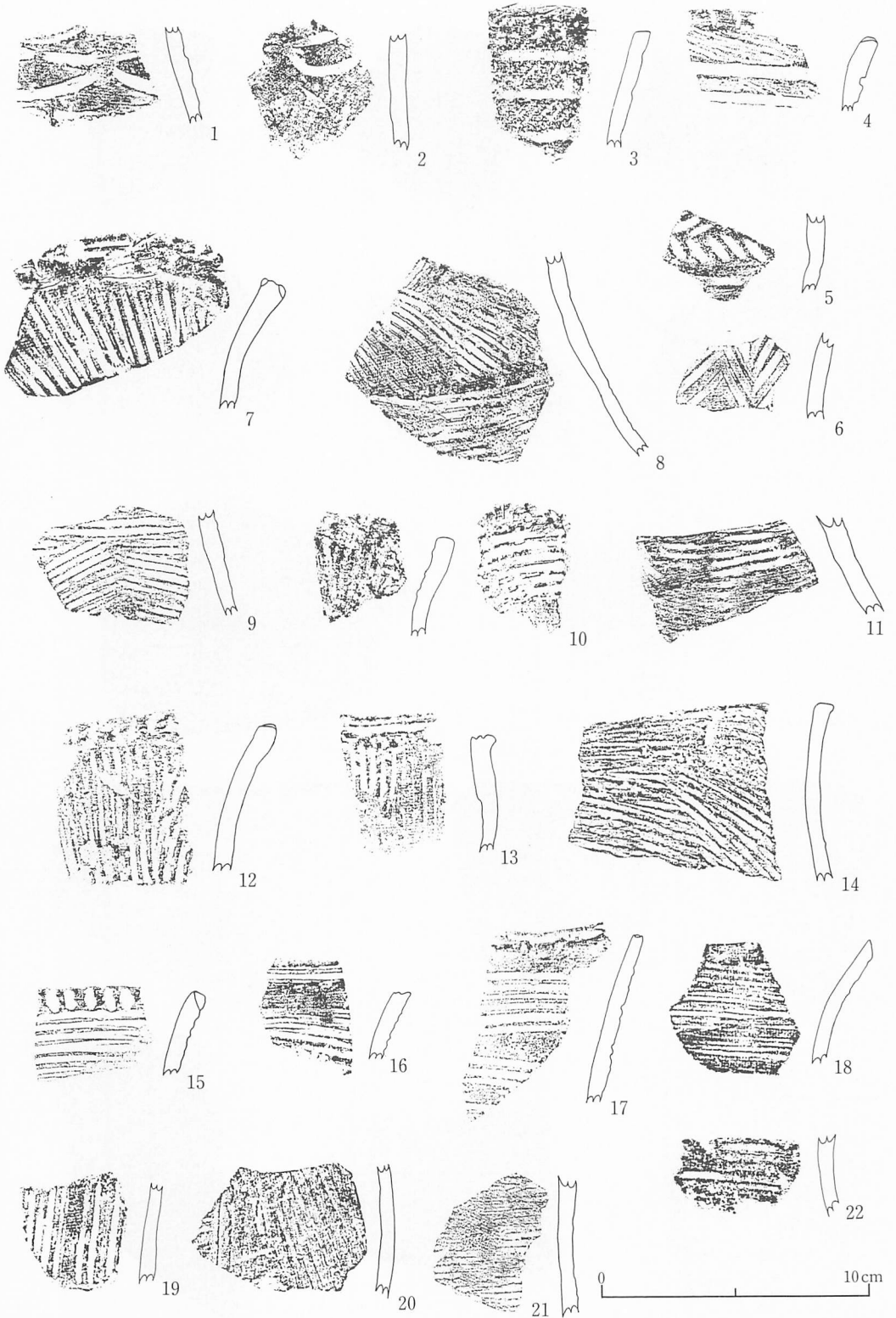
文献 笹津海祥ほか「裾野市公文名日向・丸山Ⅰ・丸山Ⅱ遺跡発掘調査報告書」 裾野市教育委員会 一九七五



静岡県駿東郡長泉町大平遺跡出土条痕系土器
(長泉町教育委員会提供)

(用語解説)

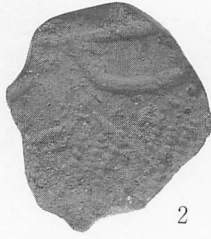
条痕系土器 愛知県の三河地方で発見された土器で、出土した同県宝飯郡一宮町上長山水神平遺跡すいしんびらの地名をとって、水神平式土器ともいっている。壺と甕、深鉢形の土器の全面に、赤貝のようなギザギザのある貝殻で、横、斜方向に条痕を施してあるので、条痕系、条痕文土器という。貝殻で条痕を施文する手法は縄文時代からあるが、この条痕は土器面の調整手法だけでなく、文様手法の一つとして表現されていることに注目されている。この土器は、紀元前二世紀の頃、三河地方まで水稲農耕(稲作)の文化が伝わってきたとき、その文化に接した縄文時代晩期の文化をもつ人々が作り出した土器で、水稲を栽培する文化と深い関係にあるものとしている。やがてこの条痕系の土器は、天竜川流域から長野県、北関東、及び東北地方南部、また東へは東海地方の静岡県から神奈川、伊豆七島まで分布し、貝殻の条痕文から荒い櫛歯状の施文具による条痕文に変化していく。この条痕系の土器は、縄文時代最終末の系統を引く、縄文系の土器と一緒に出土する例が多い。この土器の分布は、最初の水稲農耕を伝えていった人々の経路を示すものとして注目されている。裾野市内では、公文名丸山Ⅰ遺跡と佐野二本松下遺跡から、少量、破片で出土しているが、弥生時代幕明けの時期を示すものとして重要である。



第2图 丸山 I 遺跡採集土器拓影



1



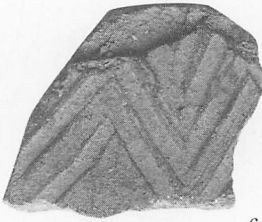
2



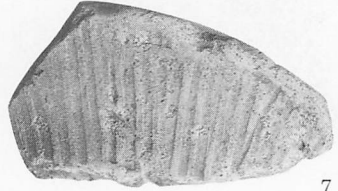
3



4



6



7



8



9



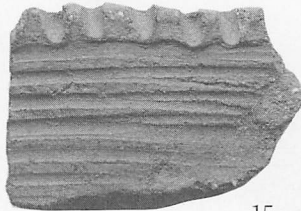
10



11



12



15

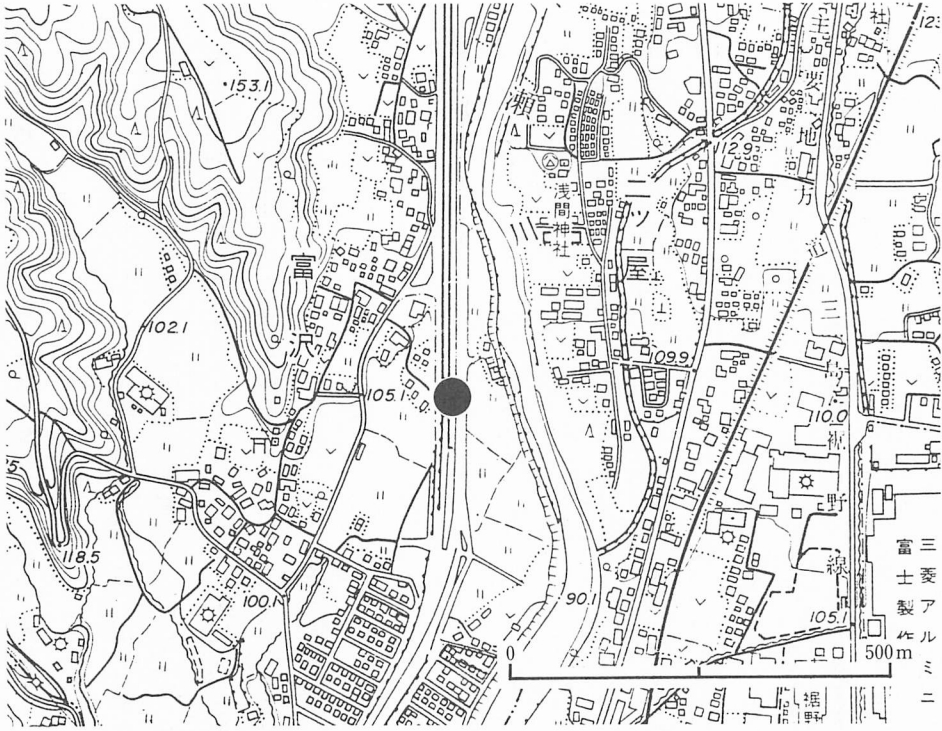


17

丸山 I 遺跡採集土器

48
富沢原遺跡
とみさわはら

所在地 裾野市富沢字原四一七番地ほか



位置図



遺跡範囲図

位置と立地 本遺跡は、富沢集落の東約二〇〇mの、黄瀬川との間に挟まれた字原地区に位置する。この地区は、北に高く南に低い緩傾斜地をなし、東西の幅三〇〇m、南北の長さ八〇〇mの広さがあるが、

全体としてはそのまま南隣の長泉町南一色に連続している。この地形は、黄瀬川の兩岸に帯状に広がる地形と同じであり、地表に、黄瀬川にみられるような大小の河原石が散在することによって、かつての黄瀬川の氾濫沖積地であったとしてよからう。この氾濫沖積地には、黄瀬川に併列した数条の凹地が南北に走り、旧河道跡を示している。本遺跡はこの旧河道間の細長く続く微高地形のところに立地する。

発見と調査 昭和五六年（一九八一）、国道二四六号バイパスが本地区を通過することになったため、遺跡確認調査をおこなったところ、原始、古代及び中世にわたる遺物が検出されたので、翌五七年（一九八二）、静岡県と裾野市教育委員会によって発掘調査が実施された。

層序と遺構 氾濫原であるため、部分的に層位の差異がみられたが、基本的には次の通りである。第一層は表土。第二層は、黒褐色の旧耕作土層。第三層は、赤褐色の塊状の土層で鉄分を多量に含む。第四層は、灰褐色を呈し、わずかにオレンジ色の粒子を含む土層で、遺物包含層である。第五層は、暗灰褐色の多量に鉄分を含む土層。第六層は、赤褐色の多量の鉄分を含む土層。第七層は、暗褐色を呈し、わずかに黄色の強い褐色粒子を含む層。第八層は、暗褐色を呈し、少量の黄色の強い褐色粒子を含む層。第九層は、黒褐色を呈し、少量の黄色の強い褐色粒子を含む層。第一〇層は、暗褐色を呈し、同色のブロックを含んだ層で、溝状遺構が検出された。第一一層は、

暗黄褐色で、わずかにスコリアを含む層で、竪穴住居址、集石土坑、土坑、円形溝状集石遺構、柱穴、焼土等が検出された。第一二層は、暗黄褐色で、こぶし大の円礫、〇・三〜一m大の河原石を含む砂礫層。第一三層は、第一二層の下部層で、同じような砂礫層である。本層序のうち、第三層と第四層は、人為的な水田造成の土層である。遺構は、竪穴住居址一カ所、集石土坑六カ所、土坑六八カ所、溝状遺構四五カ所、円形溝状集石遺構一カ所が検出されたが、それぞれの遺構の年代や性格を示す遺物はなかった。

遺物 遺物には、弥生土器一個体のほか、中世陶磁片、中国産青白磁片、古銭等が出土した。うち弥生土器は、復原の口径一六・二cm、高さ二九cm、底径九cmあり、肩部に細棒状器具による斜行の沈線文帯がある。弥生時代後期末のものと思われる。

遺跡の特徴 弥生時代の末頃の一時的な痕跡を示す遺跡であるが、中世では根方道ねがたみちの通過地点を考える上での遺跡として注目される。

現状 国道二四六号路線敷となって消滅した。

資料の所在 裾野市教育委員会 保管

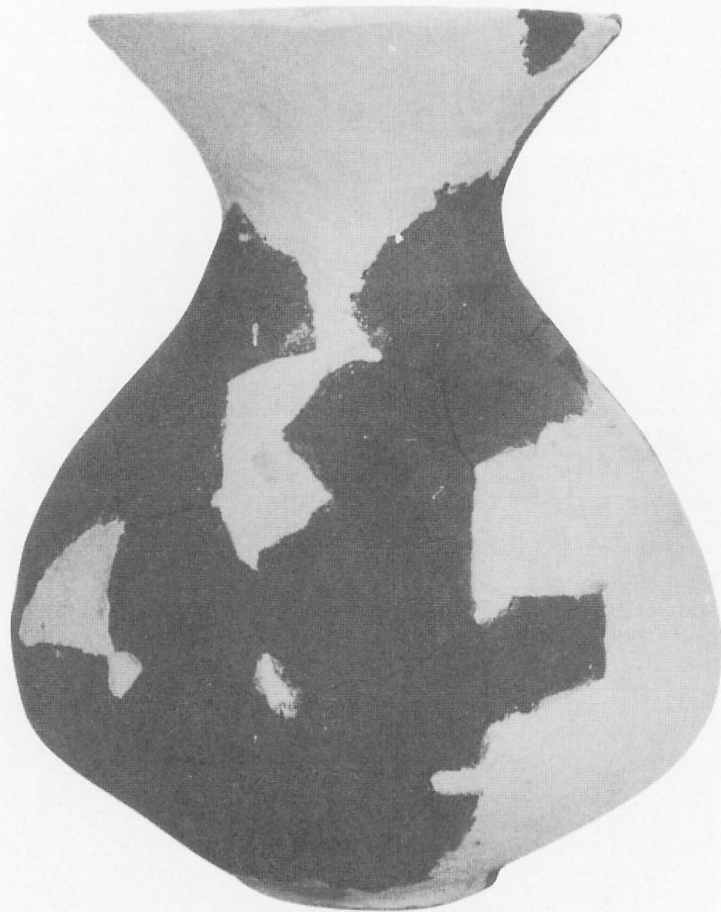
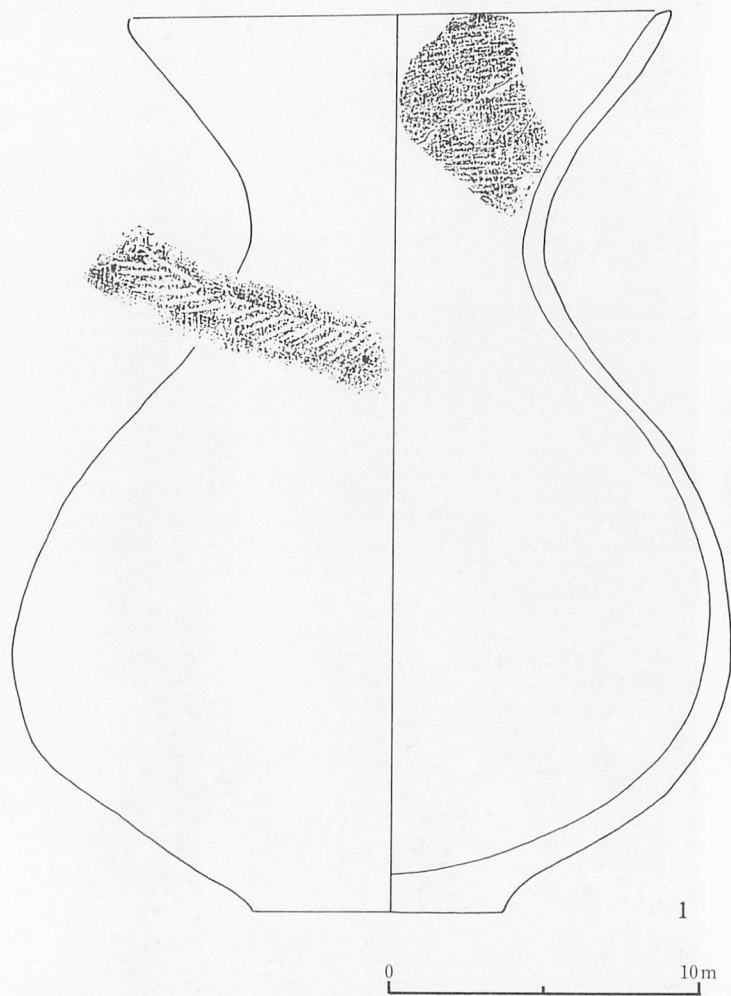
文献 袴田稔ほか「富沢原・千福馬場添・大畑・桃園入ノ洞」建設省中部地方建設局・静岡県・裾野市教育委員会 一九八九



富沢原遺跡遠望(発掘前)



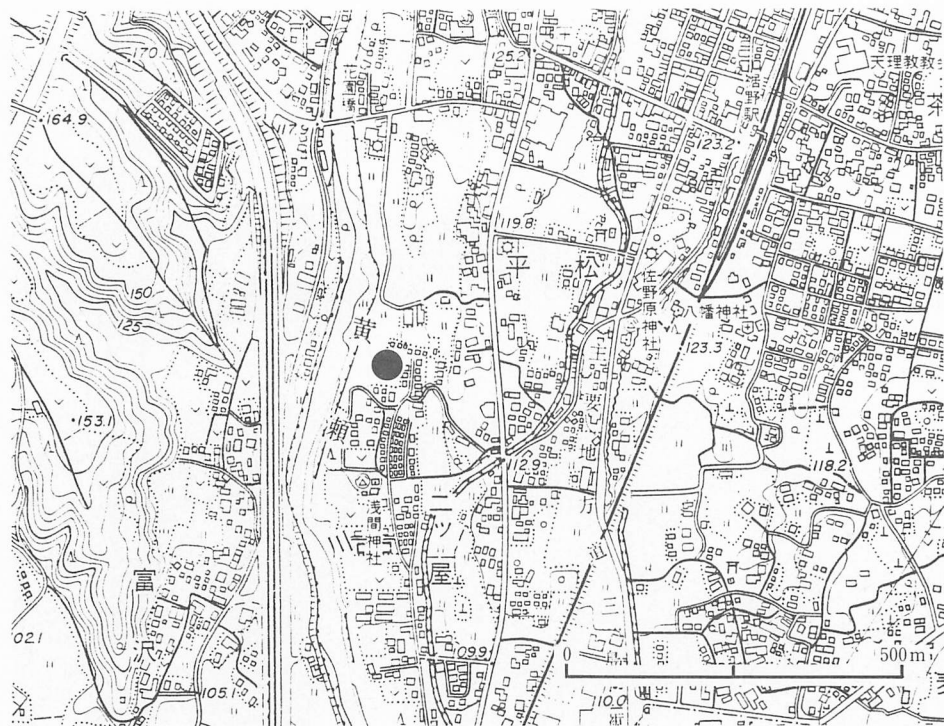
富沢原遺跡弥生土器出土状態



富沢原遺跡出土弥生土器実測図

二本松^{にほんまつした}下遺跡

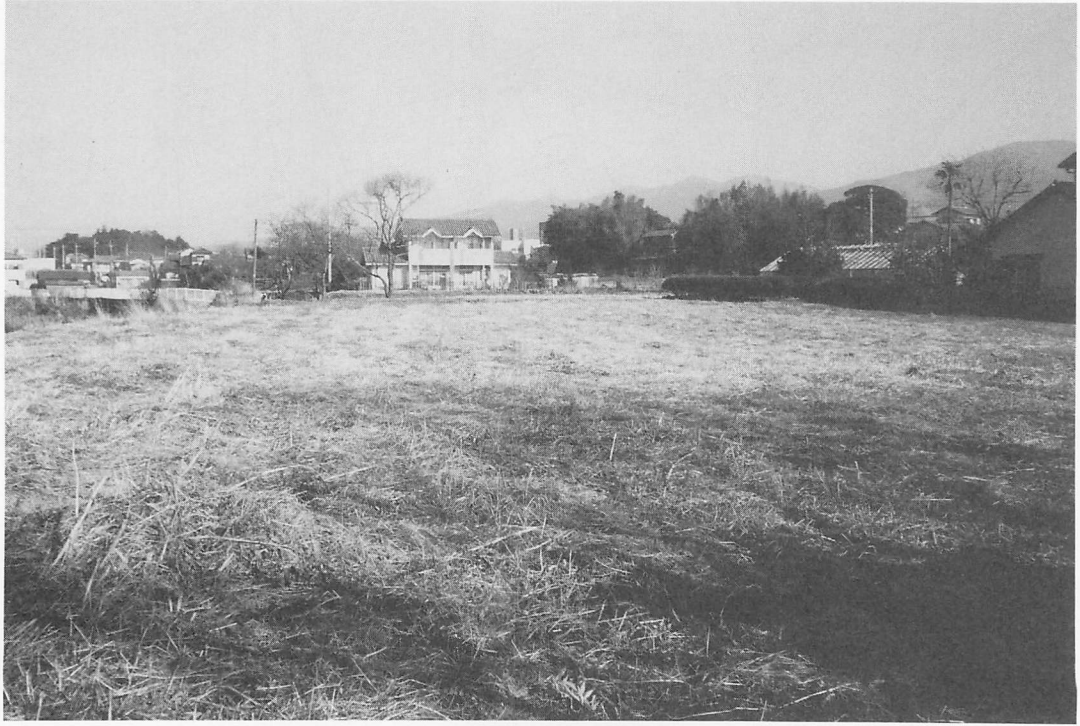
所在地 裾野市佐野字二本松一五六八番地ほか



位置図



遺跡範囲図



二本松下遺跡近景

位置と立地 裾野市佐野の二本松下、黄瀬川左岸の海拔一一〇mのところろに位置する。すぐ東側に旧黄瀬川の流路を示す顕著な凹地が黄瀬川と併行して存在し、その間に形成された河岸段丘状の地形をなしている。

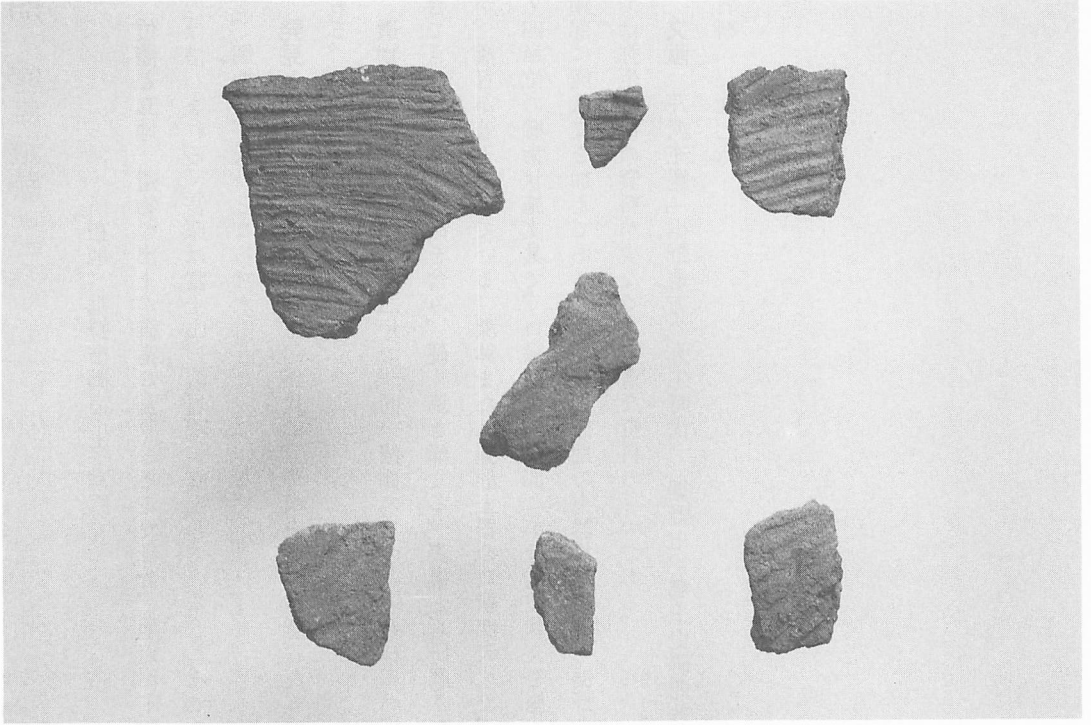
発見と調査 昭和五〇年（一九七五）頃、芹沢充寛が黄瀬川流域の遺跡調査の際に、土器片の散布することを確認した。

遺物 胎土に砂粒を含み薄手で、硬く焼き締まる。櫛歯状施文具で条痕文が施される。細片であるため、器形は不明である。弥生時代中期初め頃の土器片である。

遺跡の特徴 本遺跡は、黄瀬川の河岸に立地する弥生時代中期初頭の遺跡として、約3km下流の駿東郡長泉町南一色大平遺跡と共に注目される。大平遺跡出土の土器も、櫛歯状施文具による条痕文甕形土器で、遺跡は墓址であろうとされている。本遺跡も、これと同じ性格のものであろうか。

現状 大部分は畑地であるが、一部は宅地化されつつある。

文献 芹沢充寛「裾野地方の古代遺跡と古代文化」 裾野市「郷土史研究教室」資料 一九七八



二本松下遺跡出土土器

所在地 裾野市御宿小字宮原

位置と立地 遺物の出土が御宿の宮原とあるだけで、地点が不明なのは惜しまれる。宮原は富士山の溶岩流が露出しているところであって、畑地と、低いところは水田となっている。

発見と調査 遺物は、昭和五〇年代に、芹沢充寛が確認したものである。

遺物 土器片はわずかに二片で、同一個体のものと思われるが、接合できない。胎土に砂を含み、硬く焼き締まる。表裏とも研磨されるが、櫛目が若干残っている。深鉢または甕形土器の口縁部破片で、三〜四単位の櫛歯状施文具で、口縁部から頸部にかけて波状文を施し、頸部に簾状文を加えてある。弥生時代後期の土器片である。裾野市内では弥生時代の資料が少なく、貴重な資料の一つである。

文献 芹沢充寛「裾野地方の弥生時代」 裾野市「郷土史研究教室」資料 一九七八



宮原遺跡出土土器拓影・写真

51 平林・細山遺跡

ひらばやし
ほそやま

所在地 裾野市富沢字平林

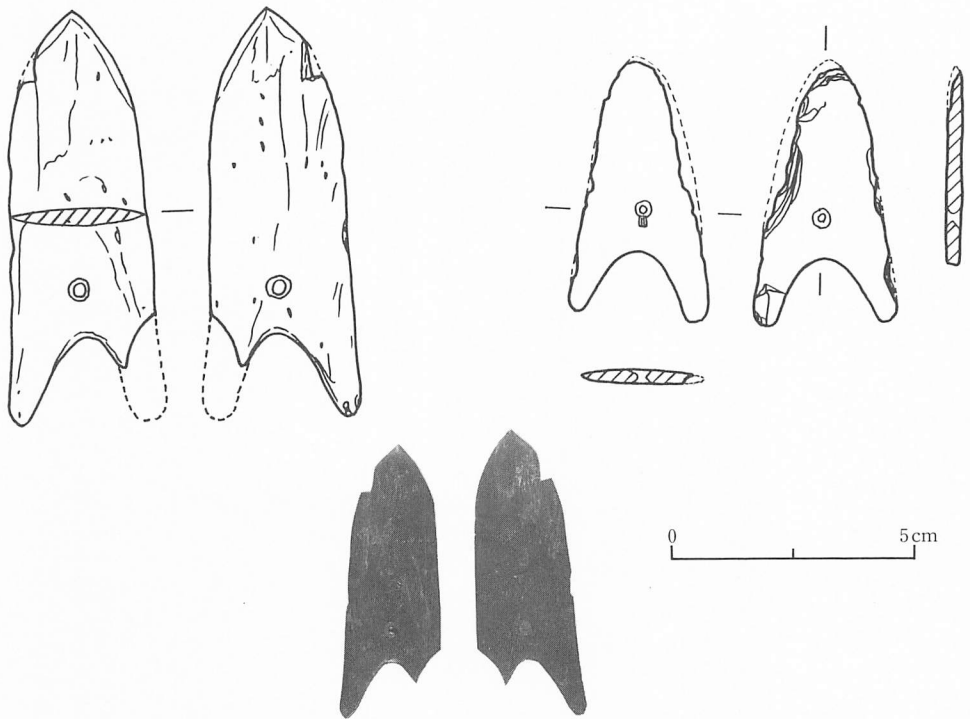
位置と立地 縄文時代 平林遺跡参照

発見と調査 遺物は昭和四〇年代、平林遺跡内から採集され、昭和五〇年（一九七五）、芹沢充寛が裾野市内遺跡調査の折、確認した。採集した地点は、現在の水田面から比高四〇～五〇mの丘陵斜面であったという。富沢字細山出土という説もある。

遺物 有孔磨製石鏃である。全長八・六cm、有孔部幅三cm、厚さ三mmの大形であり、基部の抉りは深い。弥生時代の鏃とされている。

遺跡の特徴 本遺跡とよく似た地形の駿東郡長泉町下長窪城山からも、有孔磨製石鏃が単独で出土している。愛鷹、箱根山麓の平地に望む丘陵末端部は、注意して調査する必要があるであろう。

文献 芹沢充寛「裾野地方の古代遺跡と古代文化」 裾野市「郷土史研究教室」資料 一九七八



平林・細山遺跡出土有孔磨製石鏃実測図・写真